
IS 書きなぐられた一夏は

貴仁辺人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 書きなぐられた一夏は

【Nコード】

N5357Z

【作者名】

貴仁辺人

【あらすじ】

織斑一夏。女性のみが扱えるはずのパスワードスーツ、インフィニット・ストラトス 通称『IS』を操縦できる、世界でただ一人の男性。姉に、世界一の操縦者と謳われる織斑千冬をもつ。しかし、一夏の目標は決して彼女ではなく？ 原作と違う性格の一夏。目指す方向こそ違えど、信念は変わらない。これは、そんな彼の物語。

1 クラスメイトは全員反論者（前書き）

この間まで、活動報告の方で書いていた二次創作。一夏性格改変ものとなっています。

おまけで書いているものなので亀更新、どう頑張っても同時更新不可能と判断した時点で、こちらは開示設定を「開示しない」に変更すると思います。

1 クラスメイトは全員反論者

これは、どうしたものか。

目の前で光る、名も知らぬISを見つめながら、織斑一夏はそう思った。

分かっている。これは仕掛けられたことなのだろう。でなければ、自分がISに触ったところで、反応するわけがない。仕掛人は恐らく、自分のよく知っている女性だ。それ以外に、この状況を作り出せる人間なんて思いつかない。

IS。インフィニット・ストラトス。宇宙進出を目的として作られた、いや造られた、女性のみが装着できるパワードスーツ。彼が今触って、そして起動させている物体は、そういうシロモノだ。そして、「女性のみが装着できる」という部分がミソである。

何を隠そう、彼こと織斑一夏は、男なのだ。過去に性転換手術を受けたわけでもない、完璧な染色体XYなのである。

男である自分が触ったときに反応するだなんて、ありえないのだ。

第一、前は反応しなかったのだから。

だったら、仕掛けなんてそれごと潰してしまえばいい。少なくとも、今の彼にはそれが可能だ。それも、容易に。

さあ と、一夏がISと向かい合いなにやら意気込んだところで、残念ながら自身への気合いの注入は無駄骨と化す。

それがなぜかと言えば、「その君！ ここは部外者以外立入り」といったように、背後から女性の声が聞こえたためだ。

よく考えれば、さつさとISから手を離していればよかったのではないか。

織斑一夏は自分の失念に今更後悔するも、背後で慌てて関係者と

連絡を取っている女性の声あまりに大きかったせいで、溜息は誰にも聞こえなかった。

とりあえず、今から事情聴取があるんだろうなあ。それならいっそ、このISに乗り込んで逃げ出してしまおうか。ぼんやりと彼が考えていた内容は、余りにも物騒で、しかもはた迷惑なものだった。

それから、IS学園の入学式直後までの間に、一夏が脳に記憶した情報はあまりなかった。

急遽入学が決定したIS学園で、勉強に最低限ついていくために必要な資料。殺人現場で鈍器になりえる分厚さのそのの中身と、後はIS学園で遭遇する可能性が低くはない人々の名前。彼が覚えたのは、大体それだけだ。第一に、ISの基礎知識など彼はほとんど知っていたため、ここ最近新たに開発された武装や理論の大雑把な内容程度しか、彼の頭の肥やしにはならなかったが。

強いて他に覚えたものがあるとすれば、今 教室、初のホームルーム、周りの生徒から向けられる強烈な視線からの不快感くらいであろう。とにかく、覚えたのベクトルが違う方向であることは、どうやら間違いない。

とはいえ、たかだかこの程度の不快感なら、彼はとっくに慣れていた。

たとえば、周囲の生徒が自分に集中しすぎているせいで、壇上に立つ緑の髪の小柄な教師が涙目になっていようと、彼は気にするそぶりも見せない。

そうして、やけに殺気立った入学祝いの言葉は、空気に流れて行く。

その後で、自己紹介なるものが始まった。

早くクラス唯一の男子の番に回したのであるう、早い、早い、「織斑」より若い出席番号（名字が「あ、から、おりむよ、まで」で始まる生徒）達の自己紹介は、1人20秒取っているかすら怪しいスピードで終わってしまう。

2分もしない間に、自己紹介のローテーションは一夏の番へと変わる。

全方位からの期待の眼差しを受けながら、副担任に呼ばれる前に、一夏は立ち上がった。

「織斑一夏です。2年からの志望は整備科、趣味は機械いじりと議論。得意なことは知り合い曰く勉強、苦手なことは球体型キーボードの操作です。あ、それと、机に突っ伏して寝てたりしたら大体は徹夜後なんで、授業中でも起こさないでいただけると助かります」

予定通りにスラスラと、一夏は自己紹介を終わらせた。カンニングペーパーでも用意していたのではないかとさえ思わせるほど、その説明は流暢で無感動。思わず、場の空気は一瞬静まり返った。だからだろう。

可能な限り自身のことを丁寧に教えたはずの彼は、突如飛来した出席簿による強烈な一撃を、全く予想することができなかったのだ。教室中に、パァンッ！と大きく音が響く。続けて一夏の頭と机のぶつかるゴツという音が響き、女子達から多少の悲鳴があがった。しかしけろりと一夏は起き上がり、まるで起き上がることを知っていたかのように、攻撃主 織斑千冬は、そのまま言葉を続けた。

「授業中に居眠りする予定を今から作っておくだ？ いいご身分だな」

一夏が振り向くと、そこには自身の姉 織斑千冬が、いた。

「やだなあ織斑先生、言葉のあやですよ。第一、授業中に寝るぐらいいなら、PCの中身を整理でもしますって」

「授業を受ける、授業を」

瞳を閉じて、首を左右に振る千冬。だがしかし、生徒一同の興味は別の部分へ注がれた。

「ちよつと待って、2人とも、名字は織斑？」

「つてことはまさか、2人は家族か、それとも親戚！？」

「真相はどうなの、織斑君！」

当の一夏は目を見開いていた。

自分の名前は既に何度もニュースで流れていたし、姉も世界的な
有名人。名字の一致など、とつくの昔に判明していたもの、と、彼
はそう考えていたのだ。

「いかにも、織斑先生は俺の姉だよ」と、当たり前のように彼は返
事をした。

そうして、彼を二回目の不意打ちが襲う。こちらは一夏には予想
外であったが　大歓声が、否応なしに彼の耳を覆ったのだ。

慌てて耳を塞ぐも、どうやら被ダメージを防ぐことはできなかつ
たらしい。頭に、金属音のような余韻が響く。

「五月蠅いぞ、静かにしろ！」

こういった状況には慣れていたのでだろう、千冬は特別身構えるで
もなく、教室中に響く声でそう言った。

威圧感を感じたのか、歓声は一瞬でやむ。

「別に興味を持つなどは言わん。だが今はホームルームだ。そうい
う話は休憩時間にやれ！」

そりゃないよ。自分の身が売られたということに即座に気付いた
一夏だったが、残念ながら声に出して反論することはできなかった。
千冬の言葉で納得したのか黙った生徒達を前に、千冬はようやく

仕事　担任としての　を始めた。

1 番最初の休憩時間。

当然のように、クラスメイトの女子達のほとんどが、一夏の元へ
寄ってくる。

勿論浴びせられようとしたのは飽和しきれない量の質問だったの
だろう。しかし彼は、それを「ちよつと待って」とジェスチャーで
牽制した。

「実は、知り合いがうちのクラスにいるらしいんだ。出来れば、そ
っちと挨拶してからでいいかな？　大丈夫、逃げ出したりはしない

から」

そう言つて、極めて紳士的に質問を止める。それから席を立ち上がつて、クラス中を見回す。

目的の生徒は、すぐに見つかった。何せ目が合ったのだ。

ということは、あちらも自分を認識しているはず。半分の確信ともう半分の不安をもつて、一夏はその知り合いに声をかけた。

「 篤、久しぶり」

「 ああ、久しぶりだな、一夏」

不意に、辺りの空気が静まる。それで一夏は、周囲がこちらを見つめていることに気付いた。

「 ここじゃなんだし、ちよつと廊下で話そうか」

篤の側も居心地はそこまで良くなかつたのだらう。二つ返事で了解を得て、2人は廊下へ出ていった。

廊下に、人の姿は見当たらない。

ふつう、学校の廊下といえは休憩時間は行き交う生徒で騒然としているものだ。少なくとも、一夏の頭の中ではそういうものだと認識していた。その「ふつう」の考えからしてみれば、今の廊下は非常に静かだった。

ま、初日ならまだ友人も少ないだらうし、他のクラスは今頃中で親睦を深めているんだらう。そう考えると、今の自分達は妙に浮いている。

とはいえ、別に苦になるといったわけでもない。というか、一夏からしてみれば、男子である時点で自分は浮いているのだ。既に振り切つて浮いているのであれば、これ以上「普段なら浮いて見られるような行動」をしようと、大気を突き抜けるような浮上はしないだらう。

一通り周囲に気を配ると、一夏は知り合い 幼馴染の、篠ノ之 篤 の方に向き直つた。

「 いや、あの人繋がりがあるからここに入学してるとは思ったけど、同じクラスになるとは思つてなかつたよ」

「まあ、な。それより、自己紹介も途中で切れたというのに、よく私だと分かったな？」

「当たり前じゃないか、そもそも篤、昔の姿をそのまま大きくしたように見えるよ」

特に、髪型とか。

長いポニーテールは彼女のトレードマーク、それが一夏の認識だった。

人が他人を見分けるとき、3割ほどの部分は髪型を重視するらしい。そこがそっくりで、更に纏う雰囲気も似ている。最後に会ったのは小学校の頃だが、一夏としては間違えようもなかった。

「あ、そうそう。剣道、全国優勝おめでとう」

「何故知っている!？」

「いや、どうしても何も……何せ全国、しかも優勝者は見目麗しい少女とくれば、いろんなメディアで取り上げられる」

「み、見目麗しい?」

あくまで一夏はあたりさわりのない世間的な評価を言ったままでだが、勿論篤はそんなことを知れるはずもない。

そして、一夏もそれを説明はしない。彼らの間に一つ、勘違いが生まれた瞬間だ。

最も、今のところは些細な勘違いである。

「さて、そろそろチャイムも鳴っちゃうから、教室に戻るうか」

「う、うむ! そうだな、そうするとしよう!」

少なくとも、一夏にとっては、だが。

やけに上機嫌な篤に首を傾げつつ、一夏は教室へと戻っていった。学校中にチャイムが鳴り響いたのは、2人がちょうど自身の席に着席した直後だった。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した場合は、刑法によって罰せられ教科書の内容を、真耶はすらすらと読み上げていく。」

確かこれは、5冊ほど支給された教科書のうち2番目に分厚い教科書の8ページ目に掲載されている内容だったはず。

一夏はと言えば、副担任の言葉を右から左に流しつつ、頬杖をついて欠伸を噛み殺していた。

法律に關与する部分は、ISの授業であろうとふつ々の公民の授業内容とそこまで変わりはない。そして内容も基礎の基礎だったので、ノートに文字を書き込む気すら、彼にはなかった。

「……織斑君、授業のノート取らなくて、大丈夫なの？」
不安げに、傍の席に座っている女子が一夏に尋ねる。

「ああ、うん。ここの内容は俺が初めてこれを勉強した3年前と一緒だからね。大まかな内容は覚えてるし、ノートを提出しろって言われたら昔書いたやつをそのまま提出する」

遠回しだが、一夏はこの授業を受けている必要はないと宣言したので。自然、彼に話しかけた女子からは苦笑いが漏れる。

「あ、でも、山田先生の授業はかなり分かりやすいと思うな。教えるのがうまいっていうか、そんな感じ」

そして、再び一夏は欠伸を噛み殺す。

せめてノートを取っているポーズだけでも見せればいいのに、一夏はそれすらもしない。

どうも、その姿は真耶には、「お手上げ状態」であると映ったらしい。

「織斑君、ここまでで分からない所はありますか？」

とは言え、真耶も一夏を攻める気はなかった。

そもそも入学はかなり唐突に決定したことだし、彼は今までにISに関して触れることはなかった、と、そう思い込んでいたのだから、仕方のないことだ。

最も、彼の姉である織斑千冬に、一夏のことをちゃんと聞いていたのならば

「いえ、大丈夫です。この教科書だったら、一応全部覚えていきます」

「は、はい……そうですか、それならよかったです」

というような会話と、その後の気まずい沈黙は発生しえなかつただろうが。

「それならノートをとらんか、馬鹿者」

沈黙を破ったのは、教室の隅で待機していた千冬だった。

再び頬杖をついた一夏の背後に忍び寄り、強烈な出席簿アタックが炸裂する。

衝撃で、一夏の掛けていた眼鏡がずり落ちる。

「痛いです、織斑先生」

「お前が授業をサボタージユするからだ、馬鹿者。一度覚えた内容というのは分かっているが、お前はもう少し教師に敬意を払え」

眼鏡をかけ直しながら、渋々一夏はノートを取り出す。

別に、彼は持つてきていなかっただけではないのだ。ただ単純に、そのノートが授業用ではないだけで。

「織斑、眼鏡を外せ」

「え、織斑先生！？ それでは黒板が見えないのでは？」

真耶が不思議そうに尋ねる。千冬は、それに即答した。

「いや、この眼鏡橋は視力を矯正するものではないんだ。むしろ

外の現象を無視するための装置、だな」

「？ ええつと、それはどういう」

「とにかく、眼鏡がなくても授業には何の問題もない」

「は、はあ……」

自身が眼鏡を掛けているせいだろうか、それでも真耶は納得が行かないようだ。

「織斑先生、本当に外さなきゃ駄目ですか？」

「当たり前だ、授業とは関係ないだろう」

「間接的には、関係ないってこともないですけど……」

すぱーん。小気味いい音が、またしても教室の静まった空気を支配する。

そう何度も何度も頭を楽器にされていてはたまらず、一夏はようやくと眼鏡を外した。

「それは預かっておこう、帰る前に渡す」

「精密機械なんだから壊さぬいでくださいね、『千冬姉さん』」
「分かっている」

『千冬姉さん』。呼び方を変えたということは、即ち教師生徒としてではなく姉弟として、学園での初めての会話だった。

言い換えれば、教師ではなく身内という、重要な願いだったということだ。

千冬は、現在ケースを持っていなかったもので、仕方なくその眼鏡を自分で掛けた。

途端、少々のうめき声が千冬から洩れる。

「織斑先生、大丈夫ですか!？」

「問題ない。山田君、授業を続けてくれ」

うめき声が聞こえたには聞こえたが、千冬は特によろけるでもなく、再び教室の隅へ戻っていった。

「ええっと、どこまで話しましたっけ、確か」

そうして、再び真耶の声が教室に響くようになった。

2度目の休憩時間。今度こそ、一夏は女子達による膨大な質問攻めを捌くこととなった。

質問の内容は多種多様。「ISに乗れるのは、もしかして千冬の弟だからか」「ここに入学する前は、どこの高校を受ける予定だったのか」「千冬のプライベートはどういったものか」「男性IS操縦者として、立場をどう感じているか」「メールアドレスください」。

質問内容は真面目なものが半分、ふざけているとみて間違いないものが半分といった具合だ。

その1つ1つに、一夏は丁寧に戻答してゆく。「いや、有名操縦者の親族が乗れるというなら自分以外も乗れるはずだ」「そもそも入学はせず、倉持技研という研究所で働く予定だった」「言ったら

殺されるので、ずばらすぎて部屋は魔窟と成り果てているだなんて絶対に言えない」「元々の予定よりお金が入る点ありがたい」「アドレスは4つ持つてるけどどれがいい」。返答が的確なゆえにひとつの質問に裂かれる時間が多くなる。

これは、次の休憩も質問攻めかな。一夏がそう思った、ちょうどその時だった。

「ちよつと、よろしくて？」

背後から声がかかる。質問の1つと受け取るには、多少不安なもので、一夏は数瞬だけ振り返ることを躊躇う。

しかし、ここでケンカ沙汰ということもないだろう。そう判断し、結局振り向くことにした。

彼の振り向いた先にいたのは、金髪の髪の手を持つ少女だった。

一夏はその姿に、多少心当たりがあった。

「ああ、ええつと……セシリアさん、だから……あ、もしかして、イギリス代表候補生のオルコットさん、かな？」

「あら、自己紹介はきちんと聞いてらしたのね？」

「調べれば、すぐに情報が出てきたからね。一応、同い年の代表候補生ぐらいは全員調べておいた。まさか、本当に同じクラスになるとは思わなかったけれど。専用機ブルー・ティアーズ、イグニツシヨン・プランのティアーズモデルの一種、だったかな」

イグニツシヨン・プラン。欧米連合の統合防衛計画。イギリスは参加国の1つであり、ティアーズモデルはまさきに実用化の目処が立ったモデルだ。少しばかり調べれば、情報は簡単に出てきた。

「やはり……男性だというのに、何故そこまでISに詳しいのですか？ 確か、先程の授業でも、既に内容を理解しているとおっしゃってましたわよね？」

しかし、「少しばかり調べれば」は、あくまで一夏の感覚に過ぎない。一般人の思考からすれば、5冊分の教科書をいきなり渡されれば、他のことを調べている時間などないというのが常識なのだ。

「いやほら、渡された教科書のうちいくつかは、既に知ってる内容

だったからさ。本来そこに使ってた時間を予習に使ったんだ」

「なるほど、そういうことでしたか……しかし、男性である貴方が、何故ISの知識を元から蓄えていたのですか？」

「男だから女だからって差別する必要、ないんじゃないかな？ ISに乗れるのが女性ってだけで、別にIS関係者を女性固めする必要はないし」

一夏としてはごく自然に出た言葉だったが、しかし、周囲の生徒はおかしく感じたようだ。

「しかし、乗れるのが女性である以上、中心人物は女性であってしかなるべきなのではないですか？」

内心一夏は少しだけ面倒臭さを覚える。

ISに女性しか乗れないことが発覚してから、急激に広まった女尊男卑。ともすれば街中で男性が女性に小間使いのように扱われるこの社会では、あくまで女性主義という考え方をする人間がかなり多い。

そして、世界最強のIS搭乗者でありながら別に男女差別を行わない姉を持つ一夏は、その女尊男卑の社会的な流れとは相いれぬようなきらいがあった。

「乗るのは確かに女性さ。けれど、それには優秀な技術者と研究員がいてこそだ。詰まるところ、ISに乗れる以外に男性と女性が差別されるべき部分は、何一つない。少し言葉が悪くなるけれど、セシリアさんは極端に考えすぎだよ」

確かに、それは正論だった。

ISに乗れる女性がいて、それだから女性が優遇されている。しかし、それに便乗して針小棒大に自分の権利を語る女性も多々いる。だが、男性には不可能な国家貢献をする可能性がある女性とそうでない女性をより分けることは不可能であり、セシリアの女性優遇主義もまた真理のひとつだ。

自身の持つ正論をチャンバラさせてもお互いの争いを加速するだけである。が、しかし、今この場において主流なのは、明らかに

女性優遇主義だった。

「織斑君って、変わった考え方するんだね」

「あ、でも、私、自分なりの考え方を持つてる人って好きだなあ」
そんな声が周りから聞こえる。

セシリアからしてみれば、予想外な展開であった。

そもそも、彼女は「ISを操縦できる唯一の男性」がどのような人物であるか、それを確かめようと声をかけたに過ぎない。

自分の求めていた知性のかけらは見ることができたとはいえ、周囲は自分と同じ考え方を持った人間ばかり。

自分の考えが間違っているのではない、という後押しを受けているが、逆に自分からは引き下がれない。彼女を襲っているのはそういう状況だった。

「まあ、自分の考えかたというより、かなりの男性の代弁でもあると思うけど。そもそもこの意見は去年小論文コンクールに出したものだし、一応自信はあったけど賞与はなかったから、やっぱり女性には優遇されて然るべきっていうのが社会の考え方と見て間違いはない、かな」

自分に味方はいないことを察したのだろう、一夏はすぐに引き下がった。

退くことができなかったセシリアにとって、相手の退陣は願ったり叶ったりだ。

「だった、のだが。」

「逃げるのですか？」

腑に落ちない様子で、セシリアは着席しようとする一夏に言葉を投げかけた。

「びっくりと一夏が反応したことを確認し、セシリアは更に続ける。

「まだ、わたくしは貴方の意見を聞き終わっていないのに」

一夏は、初めてむっとした表情になった。

「逃げるんじゃない　今から話すのは、時間が足りなさすぎる」

時間？　セシリアは時計を確認してみるが、まだ休憩時間は4分

ほど残っている。

2人とも、既に次の授業の準備は終わらせてあるようだった。多少引き伸ばす時間ぐらいいは、あるのではないか。

しかし一夏は、小さく首を横に振る。

「予め話す相手が誰だか分かっているなら、一番適切な言葉を吟味した上で話すこともできたんだろうけど。生憎俺は、言葉選びは苦手なんだよね、昔から。それに　こっちは、織斑先生が出席簿で止めてくれるだろうけど　昔から、俺は言い争いだと熱くなりすぎるんだ」

言うだけ言って、今度こそ一夏は着席した。

なにやら不完全燃焼な感情を残しながらも、少なくとも彼に対して失望するのはまだ早い、ということだけは理解できたため、仕方なく自分の席へと戻、

「言い忘れてた！」

ろうとした時、急に一夏が起立した。

「セシリアさん、お願いがあるんだけど！」

その、先程までとはあまりにも違うテンションに、思わずセシリアもたじろぐ。

「な、なんでしよう……？」

自然、狼狽した言い方で返事をするセシリア。

そして次の一夏が放った言葉はといえば、彼女を更に混乱させるには十分すぎるものだった。

「　ちよっと、付き合っただけ欲しいんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357z/>

IS書きなぐられた一夏は

2011年12月18日00時55分発行